Illustration／TAMAKO

R-R. Company

ひなげしのさく頃に

崇壊し編 ―魅音―

I

飛牙マサラ

R18

ADULTS ONLY

R-R.Company

ひなげしのさく頃に 崇壊し編 ―魅音― I

飛牙マサラ R18

R-R.Company Novel／ I

―「私を覚えているかい？」

山狗隊長として一人捌かれるのを待つだけの身であった小此木のもとに園崎魅音が単身訪れる。互いに忘れられない闘いの果てとはいえ、本来は決して起こりえない再会に驚嘆する小此木。果たして魅音の目的は？

崇壊し編 第1巻開幕！

あの六月の戦いから

あらたな運命の輪が回り出す。

ひなげしのさく頃に

―― 私を覚えてるかい？

SAMPLE

ひなげしのさく頃に

崇壊し編 —魅音—

I

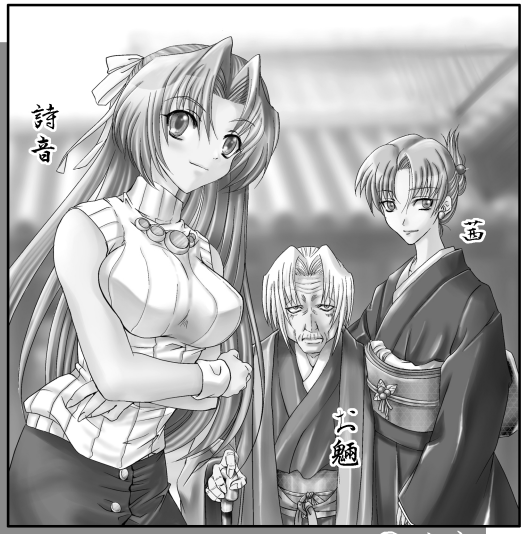
飛牙マサラ
挿絵・TAMAKO

R18 ADULTS ONLY

R-R. Company
SAMPLE

ひなげしのさく頃に
崇壊し編
―魅音―
I
登場人物
小此木
園崎魅音
SAMPLE

人物紹介



園崎家

部活メンバー

SAMPLE

ひなげしのさく頃に

崇壊し編 ―魅音―

I

Devotion 7
Distinction 107
後書き 152
奥付 154

SAMPLE

Devotion

SAMPLE

―一―

それは突然訪れた。

敗残兵として、いや、鷹野三佐が引き起こした雛見沢事件において実行部隊の要として活躍した小此木二尉は、逮捕後事件のあらましを知る首謀者の一人として退屈な事件聴取に日々追われていた。自分や部下たちの保身のためとはいえ、なかなか面倒なものである。

大概彼の判断で説明出来る範囲のものは遠慮なく言っているが、逆に立場上言えないものも多数あるわけで、その匙加減がなかなか難しい。尤もあまりに口が軽ければ、直ぐさま闇に葬られるだろうことくらいは心得ているから、その一線は譲ることはない。

そんな窮屈でつまらない状態ではあるが、ある程度の情報は入ってくる。何せ取り調べる側が国全土を震撼させた事件の鍵、小此木の口を滑らせようと焦るあまり、言わなくてもいい情報まで提供してくれるのだ。それらで判断するには限りではあるが、まず本来の責任者たる鷹野は富竹が率先して庇っているようで『東京』の監察もその所在が正確には掴めてないらしい。おまけに名ばかりとはいえ二佐として地位を受け、作戦にも参加していた所長・入江も土壇場の選択で向こう側に寝返り、対立したことでその立場は守られることになった。その後の事情聴取にも協力的であったこと、また何よりも医師として雛見沢に残留を望まれたこともあり、彼は現場に留まり事態の収拾のために奔走しているようだ。実際、雛見沢症候群の患者がいる以上、医師である入江の存在は不可欠であるため当然の処置ではあろう。

結果、責任を押し付ける適任者が小此木率いる山狗部隊のみとなり、それも隊長であった彼

SAMPLE

に比重が置かれるのは当然のことだった。
それでも未だ微妙な立場の状態が続いているのは恐らく上層部との兼ね合いだろう。形としては捕虜としたものの、結局暗部を知っている彼を直ぐさま断罪できるほど上部はクリーンではないのだ。下手なことを喋られると拙い立場の人間の何と多いことか。それなら抹殺かともいうとそうもいかない。既に表に出てしまっている雛見沢の件に関して誰かが責任を負わねばならない、そして、どう考えてもその適任者は小此木なのだからとなる。故にどう押し付けるかで争っているのだろう、出来るだけ自分たちに火の粉が降らぬようにと。
小此木自身はどのみち引責は免れないが、とりあえずは生き残れるだろうと踏んでいる。万が一、そうでなくても生き残るつもりではいたが。
裏側で動ける人間を欲している者など幾らでもいる。そいつらが動き出すのにそう時間はかからんだろう――どういう形だろうとも必ず。
そんな彼の元に突然、外部から訪問者がやって来たのは事件が粗方落ち着いた頃、夏も暑い盛りだった。
その日、何の前触れもなく小此木が置かれている収容所へ監察の一人が現れたかと思うと、彼を直に指名する訪問者がいることを告げ、直ぐさま接見室へと連れ出したのだ。それ自体異常と言える事態である。現時点で捕虜扱いの人間を連れ出すにはそれ相応の手続きがいるものだ。それが一切ない。彼を連れ出しに来た監察も動揺しているらしく、何度も彼の方を振り返っては不思議そうな顔をするのだ。
いったい何が言いたいのやら。
連れて行かれるまま付いていきながらも、何やら周囲が騒がしいのだけは分かる。成る程、どうやらそれが小此木を訪ねてきたヤツについ

SAMPLE

てらしいことは窺い知れる。

だとするなら、俺を訪ねてきたのは郭公、じゃねえな。

あいつならこんな騒ぎにはならん。それもこんな堂々と昼間にやって来ねえ。

なら、誰だ？

答えが出ないまま、目的地に着いたらしく監察の足が止まった。

「小此木二尉、こちらであなたをお待ちです」

誘われるまま案内された部屋へ入ると、一つの影が逆光を浴びて立っていた。強烈な日差しのせいではじめはそれが何なのか分からなかったが、どうやら人であるには間違いないらしい。尚も誰かというのを確認しようとすると、スッとそれが振り返る。その瞬間、小此木は流石に驚いていた。

彼を尋ねてきたのは女、それも少女がたった一人。成る程周囲のざわめきは当然だが、一番驚いているのは彼自身だ。何しろこの訪問者はこんなところに来るはずのない輩の筆頭だった。

「私を覚えてるかい？」

開口一番、園崎家次期頭首園崎魅音はそう尋ねた。

「おやおや、忘れようにも忘れられねぇなあ」

そう、忘れられるはずもない。

魅音はあの山で逢った時と同じ、静かでありながらも鋭い瞳で小此木を貫くように見つめている。

そもそも彼女は己の敗北をはっきりと認めるために選んだ相手だった。一見はただの年若い小娘だが、天性の指揮官としての武が備わっており、とことんまで山狗部隊を追い詰めた。だから彼は魅音に敬意を表して、彼女になら負けてもよいと決めたのだ。どうせ負け戦になったのなら戦う相手くらいは選びたい。それが小此木流の敗北の認め方だった。そして魅音はそれ

SAMPLE

に見事に応えてくれ、彼の望むとおりにあの下らない戦いを終わらせることが出来た。
それで終わりのはずだった。それ以下でもそれ以上でもない、関わりすら一瞬の邂逅で勝者と敗者となって分かれ、二度と会うはずもない相手だったのだ。
そいつが今、彼の前にいる。目的はまったく読めないが。
いったい何しに来やがった？
まさか物好きに俺の顔を見に来ただけのはずはあるまいと魅音に先を促す。
「わざわざあんたがお出での理由、お聞かせ願おうか？」
「別に話は簡単だ。この度、お前を園崎家が貰い受ける。無論、お前に拒否する権利は一切ないよ」
それは小此木に対する明らかなる命令で、躊躇などない。伝える魅音の顔は園崎家次期頭首として相応しい迫力を持ち、それが凛として美しい。小此木はらしくなく一瞬見とれてから、
「そりゃあ随分なご命令とくらぁな」
と笑う。それは不快を籠めた嗤いではなく、むしろ面白可笑しいというような笑いで、小気味よく周囲に響く。
「納得いった？　さて、来て貰おうかな」
魅音がコンッと軽く扉を叩いて合図すれば、あっさりと部屋の扉は開けられた。が、腕の手錠はそのままの外されはせず、相変わらず捕虜のような状態で魅音の後をついて行く羽目になる。
尤も屈辱的な扱いであるにもかかわらず彼心底楽しんでいた。
何を考えてやがる？
こんなところまで来て？
少なくとも鷹野のお姫さんや『郭公』なんぞの相手してるよりゃ退屈しなさそうだ。

SAMPLE

それが小此木の正直な気持ちである。別段自分が成り上がろうだの何だのというのはない。自分がそれだけの才がないことくらいは承知しているからだ。

面白けりゃいい。

利那的であればいい。

そうやって根無し草で生きてきた。

しかし最初は『郭公』のヤツか、さもなきゃあいつの息のかかっている輩が来ると踏んではいたんだがな。

自分を抹殺しに来るにしろ、次の命令を与えに来るにしろ近いうちにやって来ただろう。あいつらよりも早く園崎家が行動に出た、そう言うことになる。

ちらりと小此木は魅音を見遣る。

己を敗退させた女など、そんなヤツは目前の魅音以外にはいなかった。小此木の周りにいた女は良くも悪くもインテリか、さもなきゃ商売女がせいぜいだ。

常に前線を張って生きてきた小此木には一カ所で落ち着くなどあり得なかったが、雛見沢は例外的に長くいた場所だった。事の真偽なんかはどうでもいいが、それなりに退屈で馬鹿らしい日々を送ったように思う。カモフラージュとはいえこの俺が造園会社の社長やってたくらいだ。あんな経験はそうはあるまい。鷹野の姫さんや郭公たちの目的がどうあろうと任務をこなすのが山狗の役割。そしてあの計画には雛見沢住民の虐殺のシナリオすらあったのだ。

まったくご大層なもんだ。

十年近くかけた計画で、最終シナリオの大詰めはこちらの思うように運んでいたはずだったのだが、結果は自分の腕の手錠が雄弁に語っている。

そんな中で園崎魅音たちのとの戦いは彼の人生の中でかなり面白い部類に入る。何しろ自分

SAMPLE

たちプロの実行部隊が素人に負けたのだ、それも徹底的に相手の作戦に引っかかって、だ。こんなことは滅多にない。

腹も立ったが、結果的には馬鹿らしいくらい完璧に負けたのは事実だ。

はっ、踊る阿呆に見る阿呆ってな。

あのまま人生終わってもそれはそれで面白かったがね。

そんなことを考えているといつの間にか出口へと近付いており、外には園崎家御用達と思われる車が待っていた。

そのまま行くのかと思えば、乗り込む寸前に再会した時より幾分か和らいだ表情の魅音が突如くるりと振り返った。

「言い忘れてたけど、あんたには私付きになって貰うよ」

お前、からあんたに変わったな。

それにあの表情、意外だが緊張していたのかね？

俺の前にいるお嬢様はこんなところくんだりまで一人でやって来る度胸があると同時に、そんな可愛らしさがあるようだ。

いや、それはともかく今何て言った？

俺をお付きだと？

「へえ、そりゃまた大胆だな」

口笛を吹きつつ、小此木は率直な感想を述べた。それは当然だろう、何しろ彼女にとってかつて敵だった男だ。それも逢ったのはあの戦いの時のみ。それを自分の側に置くというのだ。

「あんたは狡猾だけど、頼りにはなるからね」

魅音がにやりと笑ってそう言う。

「随分俺を高く見てくれるじゃねえの」

「まあね。私と戦えたヤツなんてそうはいないし、あんたをもっと知りたくなったとでも言ったらいい？」

やはりこいつはただ者じゃない。

SAMPLE

小娘のくせに俺と対等に話せるなんて愉快極まりないじゃねぇか！

「小此木、手ぇ、出して」

魅音の言うとおり、腕を差し出せば、彼女はその腕に触れて躊躇いもなく手錠の鍵を外しにかかる。まだ『東京』の敷地すら出てないというのに魅音は小此木をもう拘束から解放してやるつもりらしい。

しかも、わざわざお嬢さんが自分自身の手で外すかね。

そんなことを思いながら、されるがまま受け入れていた。暫くするとぴんっと小気味のよい音が鳴り、鍵は事も無げに開く。

「これであんたは自由だね」

魅音が楽しげにそう笑って言いながら、手錠を腕から外してやると、それをぽーんっと小此木たちを見張りをしていた監査に投げ返す。

「それ、返すよ」

ヤツらがあっけらかんとした少女の態度に監査が驚いてるのが愉快だった。そんなことをしてくるとは思っていなかったのだろう、間抜けな面でこちらを見ている。

ああ、確かに年齢どおりに見ればそうなるだろうよ。残念だな、ただもんじゃねえのさ、このお嬢さんは。

よくよく面白いヤツが来たもんだとほくそ笑む。あの時のように戦えるわけではないだろうが、それでも胸が躍るような感覚が抑えられない。

「それじゃ、小此木は有り難く貰ってくよ」

魅音は小此木に車のリアシート側に乗るよう指示すると当たり前のようにその横に並んで座り、運転手に車を出すよう命じた。

こうして魅音の手によって小此木は不透明な虜囚から解放され、奇妙な縁で知り合った二人の新しい生活がはじまったのである。

SAMPLE

—二—

小此木の新しい生活は当然ながら一変した。まず最初に言明されたのはあくまで園崎家、何よりも魅音に仕えることだ。彼が雛見沢に戻った理由を考えれば当たり前のことであり、異存などはない。

まず内々にと言うことなのか、園崎お魎（りょう）や園崎茜など園崎家重鎮と呼ばれる連中に簡単な面通しを受けたり、葛西という男から園崎特有のレクチャーを受けたりなどやらされるべきことは山盛りあった。

尤も小此木にはそんなことは苦でも何でもなく、むしろ彼にとっては簡単なものが多かった。何かに仕え任務をこなすのがもともとの職務だったのだから当たり前と言えば当たり前だが、驚くべきはその順応力だろう。通常であれば今までこなしてきた仕事からの転換には大なり小なりの拒否反応があるものだが、それが一切なかったのだ。そんな彼に魅音は賞讃を贈るのを惜しまなかった。

「流石、元山狗、飲み込み早いね。みんなが感心してたよ」

「まあ、組織なんざ何処も似たようなところあるからな。それが役に立ってるだけだろう」

「そいや、すっかり雛見沢弁抜けてるんだね」

「ん、ああ、似非もいいところのを使ってもしゃあない。それにもう必要でもないんでな」

雛見沢弁を執拗に使っていたのは目立たないようにするためだ。怪しかろうが何だろう、堂々と雛見沢を徘徊するためには必要だったのだ。この手のコミュニティはどうしても閉鎖的であるし、特に園崎家をはじめとする御三家のような存在が村の中心にいれば厄介さは増す。故に小此木がとった方法が大げさ過ぎるまでの雛見

SAMPLE

沢弁だったわけだ。それが思う以上に効果があったのは言うまでもない。要は村人や警察の連中に警戒の意味で怪しまれなければいいのだ。慣れ親しんだとはいえ、今使う必要性はないに等しい。

「で、俺は今日はどうするんだ？　また興宮かね？」

「ああ、それは今日はもうないよ。昨日で終わり」

成る程、昨日までは小此木が使えるか否かのお試し期間であったのだろう。この屋敷と興宮の屋敷の間を行ったり来たり、時にはまったく違う場所へ行ったりと忙しなかったのだが、どうやらそれも終わったらしい。

彼を自分付きに選んだ魅音もひとまずは園崎家に認めさせたので一安心のようだ。元々敵であった男を自分側に引き入れると頭首代行が言い出したのだから相当の反対はあっただろうが、それを打ち消して認めさせたのだからたいした玉だと思う。

「さてっと、興宮の園崎にも了承得られたから今日からあんたはこの本家で暮らして貰うよ。当然そのうち村の者にも会うことになるとは思うけど、まあ、あんたなら気にしないね」

「おう、別に構わん。あんたがボスなんだからそれに俺は従うだけさ。第一、顔を見せて歩いていたわけじゃないから気が付くヤツが少ないだろうな」

「そうか、そうだね。ところで私付きになって貰うのはいいんだけど、今は私も本家を継いでるわけじゃないからあんたには当分の間、退屈かも知れないね」

魅音は扱いに問題ありと思われたらと少々バツが悪そうに言うが、小此木にしてみればさして問題はない。園崎魅音と過ごしている時間が何とも愉快で仕方なかった。

SAMPLE

敵であった男を自分の側に置くなど男でもそうそうやらないことだ。少なくとも彼であれば決してしない。普通ならばまずはじめに裏切りを思うものだ。が、何処にも例外はある。相手が、そして自分が真に信じるに値するならば裏切りも起きまい。

現時点で魅音を信頼しているのかと言われれば絶対ではない。それでも己のような条件のよくない男を選ぶあたりに好感は持てる。それを恩着せがましく言ったりしないのもよかった。大概腹に一物がなければしない選択を、この少女の場合は相手の才能の有無で決めたわけである。

その才が何処から来たのかはその祖母、父母を見れば納得することが出来た。直に会えば伊達にこの一帯を支配してきた一族ではないのを肌で感じられたし、一挙一動を見ればなおのことやはりあの祖母にしてこの孫ありと思ったものだ。

「なぁに、何でも仕事ならあるもんさ。とりあえずお買い物の荷物持ちくらいの仕事は貰いたいね」

もともと平和になった雛見沢ではそんなものだろうと考えていたし、さして気を悪くするものではない。何の裏工作もない分、至って気楽と言うものだ。

「んじゃ、早速頼もうかな。婆っちゃや私たちの食料買いに行きたいし」

小此木としては半ば冗談で言った台詞ではあったが、魅音には名案と聞こえたようだ。自分自身が買い物にやられるのは当然として、今の言葉からすれば彼女自身も行くつもりのようだ。

「ん？　わざわざ嬢ちゃんが自分で？　別に俺に任せてここで待ってりゃいいだろうに」

「まあ、そうなんだけど。婆っちゃのことはお手伝いさんが来てくれてるし、私は自分でやれ

SAMPLE

ることを人に頼むのは好きじゃないんだ。あんたが一緒に来てくれるなら車も出せるから買い出しも楽だしね」

そこまで言ってから魅音は小此木が言った言葉が気になって尋ねる。さらりと聞き流すには捨て置けない気がしたのだ。

「小此木、ところで『嬢ちゃん』って何？」

「あんたのことさ、何と呼ぶにもまあそれが一番しっくり来る」

そう言われても当人としては『嬢ちゃん』などという呼び方には難色を感じるのだが、代わりになる呼称が浮かばない。

「何か、私がえらく子供みたいな気もするんだけど」

「あのな、年考えろ。俺から見たら嬢ちゃんで十分だ。それともお嬢様とかの方がいいか？」

それはパスと即答して、魅音は考えるが、やはり読んで貰うにちょうどいいものは浮かばなかったので納得することにした。

「んー、まあ、いいか。あんたに様付けとかで呼ばれるのも嫌だし。あんたはもともと私には使ってないけど、敬語もパスね」

「あいよ。で、嬢ちゃん、何処へ？」

「とりあえず車だから町の方がいいよね。遠出だから婆っちゃに言ってからだけど、興宮へ行こう。あんたの身の回りのものもいるし」

婆っちゃに言ってくるから車で待っててと言い残し、魅音は屋敷の奥へと消えた。

まだほんの数日の付き合いだが、自分の新しい主人たる少女はやたら細かいところに気が回ると小此木は思った。成る程あれだけの戦いを山狗相手に少人数で徹底的に掻き回しただけのことはある。

いつでも的確に周囲の状況を、そして仲間の動向をきちんと把握している。

どんな優れた兵士も優れた統率者がいなけれ

SAMPLE

ばあっさり負けるものだ。
なかなか面白いじゃねえか。
そんなことを思いながら、魅音に言われたとおり車庫へ向かい、車の傍で煙草を吸いつつ、彼女が来るのを待つとする。
ほんの五分ほど過ぎた頃だろうか、少し長く感じた時間の後、少女が早足で彼の元に帰ってきた。
「お待たせ、婆っちゃはとりあえず何もいらないらしいや。うん、でも、食料も一人増えてるし、あんたは男だから結構食べるよね」
独り言のように言いながら魅音は車に乗り込み、何やら頭の中で何がいるのかを組み立てていく。
「そうそう、あんたの必要なもの、ちゃんと考えた？」
「ん～、取り立てているもんもねえやな」
もともと必要最低限のものは貰っているし、過剰になるものは元から小此木は好まない。
「着替えだの何だのはもっとあっていいと思う。いい加減、作業服の着た切り雀はやめてよね」
んなの着慣れてるからいいじゃねえかと思うのだが、そうは問屋が卸さないらしい。
「洗濯はしてるぞ」
「そういう問題じゃないってば」
魅音があくまでも拘ってくるので小此木としては降参する以外にない。
「わぁた、わぁた、なら、嬢ちゃんが選んでくれや、俺にゃそう言うセンスはない」
「仕方ないなぁ、小此木は」
そう言いながらも少女は妙に嬉しそうに笑う。誰かの世話をすることが楽しいのだろう。そんな会話が男にも何故か楽しい。
そうして町に着けば魅音が小此木を引っ張りまくってあっちやこっちへ行きまくり、ようやく家路に着く頃には荷物を車に載せることすら

SAMPLE

一苦労になる有り様だった。
「嬢ちゃん、幾ら何でも買い過ぎだろ」
買い物の量を見て、流石に少女もやり過ぎたかという表情になるが、直ぐにまあいいよねと微笑う。
「久しぶりに誰かと買い物したから羽目外しちゃったかな？　でもま、これでようやく小此木も着た切り雀とさようならだし」
それが何より一番嬉しいらしい。そんなことが何故嬉しいのかは分からないが、可愛らしい笑顔を見るのは悪くはない。が、一つだけ言いたいことはある。
「だからつって、こんなに買わんでもいいだろが」
小此木がそう言うのも無理はない。確かに食料も結構な量であるが、魅音は彼個人に関する私物もそれと同じくらいに買い込んだのだ。衣服や生活に必要と思われる小物なんやら、持ち主になる男の意見を聞いたのは最初だけ、後は彼女の独壇場だ。
「駄目駄目、どうせほっといたらまた作業着に戻るつもりなんだから買える時に買っておかなきゃ」
魅音の突っ込みがあながち間違いではないあたり、小此木は言い返せない。
「ほーら、みろ」
「へいへい、お嬢様の言うとおりで」
バツが悪そうに煙草を銜えながら、この娘にゃ敵わないなと思う。忌憚のない意見を遠慮無しにいうところや、買い物に関する取捨択一の素早さなど見事と言う他ない。確かに今回の買い物では大量に買い込んではあるのだが、そこに無駄は一切ない。必ず使う前提で決めている。到底、小此木には出来そうにない真似ではあった。
それにこんな暢気な買い物など久しぶりか。

SAMPLE

SAMPLE

荷を積み終わり、己の主人が今日の買い物漏れがないかをチェックしているのを眺めつつ、そんなことを思う。

まあ、確かに俺だけなら何も買わんで終わりそうだぁな。

妙に納得しつつ銜えていた煙草に火を付け、紫煙を吐き出して一息つく頃には魅音が助手席に戻って来ていた。

「ん、大丈夫。今日はこれで終わりだね」

「なら、家に戻るか」

「あ、そうだ」

魅音が何かを思い出したように言うので、小此木はそっちを見遣る。

「あん？　何か忘れ物か？」

「うん、そう、忘れ物だね。やっぱりこれだけはちゃんと言わないと――小此木、これからよろしくね」

少女が改めてそう言うので、少々面を食らったが、男も直ぐにそれに答える。

「こちらこそよろしく頼まあ、嬢ちゃん」

成る程、挨拶を忘れたって言う意味か。礼を欠かぬってヤツだな。見習いたいね。

交わした言葉が妙に暖かい。

そのまま、キーを回せば、車のエンジン音が心地よく鳴り響き、二人を乗せて雛見沢へと戻っていった。

SAMPLE